

母の誕生日に大雨のTDLへ はしゃぐ母、鼻グシユンの娘

月曜日、教室でくしゃみをレンパツするM美。「風邪？」と声をかけると「昨日はしゃぎすぎちゃって・・・」と鼻をズズツ。

昨日は確か大雨だった。寒いなか、どうせ彼氏とデートでもしていたのだから。うらやましい風邪ネ、と言おうとすると「昨日ね、お母さんとデートしちゃったのよ。夢の国まで。」

昨日はM美の母の誕生日。そのプレゼントに、彼女は母をディズニールランドに連れていったのだ。「前日に誘ったんだけどこれが意外にも嬉しかったみたいでさ。すぐにカレンダーにおつきくハートマーク付けちゃうくらい」「可愛いでしょ」、なんて笑いながら、またクシユン。小学生のころ以来の母娘でのディズニールランドは、朝から大雨だった。そう、ふたりはそろって雨女。しかし母の「行きたい！」のひとことで、なんと豪雨決行となったのだ。M美が昨日のうちに現像したという写真を見せてもらった。レイン

コートを着たふたりが髪をびしょびしょにして笑っている。いや、彼女たちだけじゃない。写真に写る周りの人もみんなレインコートだ。

「ミッキーまでレインコート着てるのよ！」とM美。こんな光景見たことない。写真の端には折れて捨てられた傘まで写る。ここは本当に夢の国：!?

しかし、「お母さん、すごくはしゃいでて楽しそうでさ、私も嬉しくなっちゃったよ」。ふたりにとつては、十分夢の国だったようだ。素敵な誕生日プレゼントになったことだろう。写真を見終わって気が付いた。ミッキーやミニーの着ぐるみと写っているのは、M美の母ばかりだ。

「ミッキーを追いかけるお母さんはずごいよ！パーゲン会場にいるときと同じ目で、走る走る！」。雨の中ミッキーを追いかけても、ズブヌレになりながらジェットコースターに何回乗って

も...。今朝も元気に会社へ行ったという。「おばさん強し！追い回されてミッキーもきつとびっくりしたと

大学生の実態とはこんなものよ！ どこへ消えた人・ひと・ヒト？

なんだあー、この人の群れは。

大学の前期授業が始まった4月中旬頃の風景。1限の講義に間に合うよう家を出てきたS子は、モノレールの駅構内で目をむいた。人・ひと・ヒト：であふれかえったその場所は、駅の外へ出るにも時間がかかる。

この光景を見るのは、1年ぶりのこと。毎年恒例の人ごみ。講義に關しても同じだ。大教室の初回講義では、あふればかりというか、正直、かなりあふれていると表現する方が正しい。椅子に座れない人や、果ては教室に入れないかギリギリの人もいるのだから。「教室に移動して、席を確保してからお弁当で良いじゃん」とS子は友達と約束する。

思うっつ...クシユンっ!!」娘の風邪は、まだまだ治りそうにない。(直)

頃から、急激に人が減っている。ペデ下を歩いていても、人のポリウームが以前よりなくなっている。講義でも、普通に空席を発見できるようになる。食堂も少しは余裕が出てくる。久々に食堂に行けるね、とお弁当を持参しなくても良い喜びに、踊りだしたくなる。

しかし、皆、どこへ消えていくのだろうか。あんなにいたのに!?! S子は毎年首を傾げるが、真相は不明だ。まあ単純に考えれば、大学に時間割通りに通う人が減ったということか。生き方が器用になった、と言ってもいい。出席しなくても大丈夫な講義には極力出ないようになっている。

「久々に食堂に行きたいけど、今は仕方ないわ」
と少しだけ我慢している。
ところがGWが明けた

大学は良い意味でも、悪い意味でも「自由な」場所。講義を受けるかどうか、自分の気分次第。サボるかサボらないかも、自分の裁量次第。





第。4年間をどう生きるか、何に打ち込むかも好きなように決められる。大学時代はそんな、緩さと厳しさがミックスされた時間だ。

今年はずボらないようにしよう、と決意してS子は1限の講義へ向かう。映画を観た後に、感想を提出しなくてはならないので出席が必要だ。大学生活も折り返し地点にさしかかった。有意義な講義にしよう、との思いから取った講義の数々。バイ

絵なんて何も知らないのに、でも、ちよつぴり感動のモネ展

「暑いね・・・」。照りつける日差しの中、予想以上に長い列に友達と並んでいた。GW中ということもあってか、六本木の国立新美術館で行われているモネの大回顧展のチケット売り場には、すでにたくさんの方が並んでいた。

絵のことなんて何も知らない私。それが、何気なくみていたポスターに誘われるように、「行きたいね」と言っ、今日やってきたのだった。友達に少し絵を習っていた時期があったらしい。だが、私たちには

トや部活や就職活動のことも考えて、巧く時間割を組み込んでいる。

せっかくの大学生の時期、いろいろなことをかじっておきたい。何でも取り組む。今年からS子は、ずボらない。疲れてたまに講義中に寝ることはあるけど、それくらいは大目に見て。

(五)

モネに関する知識は何もなかった。

美術館の中に入ってもやはりたくさんの人。出展数97点という100点近い作品をひとつひとつ見てゆくことは、かなりの時間を要した。「足が痛いね」と言いながらも、私たちは一応全て見て回った。

絵は、モネのそれぞれの時期に応じて5つの章に分けられて展示されていた。

「これどうやって書いているんだろう」「この色きれいだね」「近くで見るとそうは思えないけど、離れた

ところから見るとすごいよね」

友達と素人ならではの感想を言い合いながら、

みて回った。宣伝にも使われているあの有名な「日傘の女性」もあった。

第4章の連作のコーナーでは、同じものを対象に、繰り返し描いた絵があった。「積みわら」、「ポプラ並木」や「ルーアン大聖堂」などがそれぞれある。同じものを対象に描いているにしても、絵から感じる雰囲気それぞれ違う。あとでパンフレットを見てみると、繰り返し同じ風景を描くことにより、「光の変化が色彩の

ニュアンスにどのように影響を及ぼ

しているか」ということを表していることがわかり、少し勉強になった。晩年のほうでは「睡蓮」を描いた作品が大半であった。「睡蓮好きだったのかな？」と友達が言うくらいであった。

キャンバスの端の方まで十分に描かれていず、空白の部分が残っている絵もあった。これには私たちは驚いてしまった。

「モネって結構いいかげんだったの？」

素朴な疑問は残ったが、モネの絵のポストカードをちゃっかり買って帰った。

(青)

「ここ、女性専用車ですよ？」 勇気ある一言に感謝

ある朝、女性専用車に乗っていた。通勤ラッシュの時間だったので、もちろん車内は超満員。そんな時、女性専用車に乗ろうとしていた一人の男性を見とがめて、若い女性が優しく声をかけた。

「ここ、女性専用車ですよ？」

すると男性は降りるところか、そ

のまま乗ってきた。女性がもう一度注意すると・・・

「いちいちうるせえんだよおおお おおお!!! こんなの強制じゃねえだろ!!」

男性はものすごい大声で怒鳴り、その声に怯えたかのように車内は静まりかえった。怖いなと思っていた

ら、一人の女性が「なに威張ってんの？」と言いつ返しした。

その勇気に後押しされたのか、車内の女性から「降りろ」コールが巻き起こった。

その後も男性は騒ぎ続けたため、ついに駅員が駆けつけ、電車は一時ストップ。降りそうとしても、どうしてもその電車に乗りたいたのか降りようとしなない。

ようやくに男性が違う車両に行くことで、その場はひとまず一件落着きました。

車内ではその場に居合わせた女性同士に妙な連帯感が芽生え、「あの人がどうしてもこの電車に乗りたいたいのね」「男性専用車もつくればいいのよね」などと井戸端会議状態に。そんな時、一人のおばあさんがこう

言った。

「刃物でも持ってなくて良かったわねえ……」

確かに、もし何か刃物でも持っていたらと思うとぞっとする。あわや大惨事に発展しかねないところだった。

嫌だなと思っても、なかなか注意できる人は世の中そんなに多くないだろう。あの時、勇気を出して注意してくれた女性たちに感謝したい。

でも誰もケガすることなく事態がおさまって本当によかった。

(緑)

世論調査で「ひすのぼんちやん」の仲間

先日、世論調査のアルバイトをした。決められた地区の十数軒を個別訪問して調査するというものだ。昔は抵抗なく調査を受け入れてくれる家庭が多かったというが、現在では

回収率60%前後。訪問客を警戒する家庭が多くなっている。

山岸サトさん(仮名・76歳)もその一人。訪れた私を、初めは居留守をして応じてくださらなかった。2度、

Campus Now

3度と繰り返し訪れていると、やっと戸を開けてくれた。隣には、サトさんを心配した旦那さんの姿もあった。

サトさんは私を見て怪訝そうな顔をして言った。

「あなた、何をしている方なの」

調査している会社を説明し、何とか協力をしてもらえないかお願いをした。ところがサトさんは、「政治なんか分からないのよ、できないいわ」と言うばかりでなかなか協力してくださらなかった。

「政治だけではありません、医療問題などの質問もあります」。相手は高齢の女性。医療問題に関しては私にはない特別な思いがあるのではないかと思っただけだ。

「どんな質問なの」。説明しているうち、私はサトさんが医療関係者であることに気づいた。案の定、サトさんは元看護師だった。

調査の中には、延命治療や安楽死

に関する質問があった。その話を向けるとサトさんは目を潤ませながら、看護師時代を振り返り、人を助けるための医療現場で亡くなったといった多くの人を思い返していた。

そして、「私には忘れられない夜があるんです」と口を切り、自分が担当していた患者さんが一夜にして3人亡くなったという話をしてくれました。

いつの間にか目を潤ませているのは、サトさんではなく私になっていた。どのくらい話をしただろうか。最後にはサトさんは調査に快く協力してくださった。別れ際に、私の肩を叩いて言った。「あなたはこれからなのよ。頑張りなさい」。そして部屋の奥から缶コーヒを持ってきてくださった。その心遣いが嬉しかった。私は、サトさんと別れてから、すぐにグビリとコーヒを飲んだ。乾いていたのが潤い、疲れていた私の目を醒ませる味がした。

(明)

